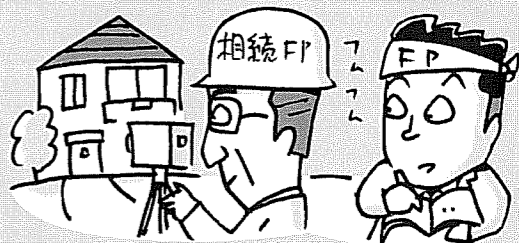


目指せ！ 相続FP

誌上

～「実践力」を身につける特別講義

相続支援ネット代表 江里口吉雄



相続FPと 宗教のつながり

今回のテーマ

あるはずの財産がない
「やはり寄付っ！」

最近、相続の現場でよく体験するのはなんとと言っても宗教です。なじみのある宗教であればいいのですが、聞いたこともないような新宗教と言われる名前が出てくると非常に戸惑ってしまいます。も

ちろんクライアントの宗教問題に相続FPが関与すべきではありませんが、クライアントからの微妙な相談や悩みに対して無視するの

も考えものです。そこで今回は多岐にわたる宗教についてお伝えしていきたいと思

い反面、ちょっと複雑な悩みでもあるわけ

母親から聞いているその団体には嫌悪感を持っているわけではな

その後、相続が発生したときには特に心配したようなことは一切なく、

また、相続人になる予定の妹がある新宗教の信者になってしま

ところが、実際に相続においては遺産分割でそのようなことは一切なく、その心配事は取り越し苦

すべての新宗教が 反社会的という誤解

新宗教という言葉に世間では少し誤解があるかもしれません。相

続FPは世間で言われるそういった誤解にも正しい理解と見識を少しは持ち合わせている必要があります。

その理由の一つが最近の新宗教の一部が社会的事件を起こす例があるため

新宗教は、昔から反社会的なイメージとともに邪教的に見なされてしまうことが多く、さらにここ10年ではオカルト宗教という表現

学術用語としての新宗教は、そのような反社会的イメージの意味は全くないのです。学術用語としての新宗教と社会的に理解され

日本の現代社会において日本全体で1割を超えと言われる人々がそう

FPとして顧客との距離が縮まる

例えば、相続人であるクライアントのAさんは、親がそれなりに財産を残したはずにもかかわらず、いざ相続をしてみると財産がずいぶん減っていたと言います。

実は、相続人が宗教というものを身近に感じるのには、親の葬儀の時

「たぶんこれくらいはあるはずだ」「まさかそんなに少ないはずはない」というように、親の財産が予想と現実では違っていたときに宗教の存在を思い知ることになります。

「たぶんあるはずだ」と感じるのは、例えば駐車場などの現金収入で生計を立てていた親の相続があったとき、

そもそも新宗教というものは宗教の中でどのような範囲かといえば、それは19世紀初め、

新宗教の対語として存在しているのが、既成宗教です。既成宗教は日本の古代の神話から始まる

相続の現場で必ず出会う葬儀は、そのような既成宗教の儀式の中で執り行われるものです。

現代の日本人には信仰もなければ宗教もないと欧米からは言われています

点であるキリスト教の宗教観から

1000万円はあるだろうと期待してタンスや机の中を探しても、いつかこうに通帳や現金が出てこないときがあります。

「いったいお金はどこに置いてあるのか」と不思議になってきたときに、生前に親が世話になっていたと思

「やはり、寄付していたのか」と預貯金等が何も出てこない理由をそこに

ただ、実際にはほんの少し財産が減っていた程度のこと

Bさんのケースでは、年配いた母親がある新宗教に夢中になり、毎月その集まりの旅に出かけて行くことを心配して

見ただけのものです。日本人は実は、極めて宗教的で

ヒッピーカルチャーが 新宗教へ影響を及ぼした？

ここで筆者が30年ほど前に体験した宗教的関わりを思い出しなが

宗教的関わりといっても筆者が特に特定の宗教の信者にな

1980年代にヨーガブームが訪ずれたこともあって、インド哲

インド帰りのヒッピーに限らず、

の旅を求めて旅を続けていく時代でした。脱物質文明やコミュニケーション(共同体)、そして西洋哲学から東洋哲学へと世界の価値観が変化していく時代でもあったのです。玄米正食のマクロビオティックや今では当たり前のオーガニック野菜等もその当りの精神文化から登場してきたものです。

筆者がヒッピー時代に出会った多くの旅人は、それぞれの宗教的教団で修行をしていくことが多かった記憶があります。筆者は当事インドから帰国後、ある曹洞宗の寺で座禅を組み、毎日ひたすら面壁(めんぺき・注2)をして只管打坐(しかんたざ・注3)三昧の生活でした。また、当時は鈴木大拙(注4)の「禅の世界」が世界中のヒッピーを魅了していた時代でもありました。

インド帰国後の前後10年間は、ある意味では世間とは隔離されたひとつの宗教的世界だったのかもしれない。

ヒッピーという当りのカウンターカーチャーの価値観の世界で、時間が止まった時空間を生きてい

た筆者の体験は理解しにくのではないかと思います。

今から30年以上も前には、世界中がカウンターカーチャーに夢中だった時代がありました。

ヒッピー、アヴァンギャルド、ミニスカート…といったものです。サイケデリックな時代にカウンターカーチャーは「抵抗」「反対」という意味で当事ヒッピームーブメントの精神世界に生きていました。

そしてその精神は、新宗教の世界でも生き続けていると感じています。

ヒッピーカルチャーが新宗教へ影響を与えてきたことも事実ですが、本来の新宗教は静かな中にも天啓を受けた教祖が霊的パワーも含めて組織化していったものです。

宗教を言葉や理論で語ることは無意味ですから、新宗教の存在を素直に認めてそのパワーをしっかりと受け止めて相続人とともに同じ見識で対応することが今後必要になってくるのではないのでしょうか。

注1 1970年代前後に脱物質文明を唱え生まれたヒッピームーブメントの若者達。

注2 禅宗において修行僧が壁に向かって座禅を組むこと。

注3 道元の坐禅は、ただひたすらに坐ることであり、それに成りきることで体と心一つになるとした。

注4 すずきだいでつ、明治3年生まれ。仏教の禅を西洋へ伝えようとした。史上初の英文による仏教研究雑誌「EASTERN BUDDHISM」を創刊。

相続FPとして新宗教をどう捉えればよいのか

新宗教が相続の現場ではそれほど多く登場するわけではないのですが、日本の人口の1割を超すのですから、何も考えず「宗教はごめんだ」と避けても顧客の問題解決にはならない場合が多いと思います。

今、情報はすべてインターネットの時代になりあらゆる情報が瞬時にリアルタイムで入手できるようになりました。

クライアアントが新宗教に関わっていることが分かった場合に何らかの対応を考えておく必要があると思われれます。宗教的なことに首を突っ込む方がいいのか悪いのかではなく、相続FPの使命として相続人の抱える問題を円満に解決するために必要なことでしょう。

宗教と聞いただけで知らん振りしてしまうのもひとつの顧客対応かもしれない。

しかし、クライアアントからアドバイスを求められた場合には、しっかりとした見識の下に相続人を支援すべきの確なアドバイスは必要だと思います。

ただしアドバイスするには、興味本位ではなくあくまでも相手の立場や考えた方を尊重してその上でアドバイスすることが懸命です。

宗教に関する見識として特に新宗教に関してはとくに偏見と誤解があるので、新宗教を日常のものとして当然ライフプランの一つと捉えていくことも相続FPの今後の課題かもしれません。